

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390300483		
法人名	有限会社 九州ライフサポート		
事業所名	グループホーム はっぴーらいふ		
所在地	熊本県人吉市下原田町荒毛1516-1		
自己評価作成日	令和3年10月24日	評価結果市町村受理日	令和4年1月14日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和3年12月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホーム周辺は静かな住宅街の中にあります。天気の良い日は運動とリラクゼーションを兼ね近隣を散歩を実施しています。ホーム内は家庭的な落ち着いた雰囲気であり、薪ストーブを設置した暖かみのあるリビングと各入居者の居室に分かれ、長い廊下は歩行訓練の場としても活用されています。生活リハビリとして洗濯や料理の一部を手伝っていただく等、ご利用者お一人お一人の心身状態、能力を見極め、スタッフおよび同事業所のPT、OT等とも連携しながらその方にあった脳トレや運動プログラムやかかわり方を日々検討しています。また、花見や祭りなど季節ごと行事に関しては感染予防対策も年頭に置きながら可能な範囲で実施し、メリハリ・刺激ある生活が送れるよう支援しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

昨年の豪雨やコロナという難局とともに重度化傾向(平均3.75)にある中で、入居者一人ひとりに寄り添えるところがホームの強みとしてのケア姿勢と、法人のバックアップを受けた確なりハビリによりADL低下防止として長く入居生活が送れる事を信条とするホームである。コロナ禍やレベル低下傾向により個別レクを充実させ、入居者個々のバックグラウンドの把握及び受容・聴く姿勢が、入居者の思いを引き出し、穏やかな日常へと反映させている。勉強会やケア会議を充実させ新たな取り組みやヒヤリハット事例の検証等業務改善に向けた双方向の意見交換に職員同士の意思疎通の良い関係が表出している。運営推進会議の開催は、地域の水害に状況把握として生かされており、近隣住民の高齢化等も鑑み、更に地域に根ざしたいと意欲的であり、地域への貢献も視野にした活動に大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新入職員への研修を行う際に施設理念や施設方針を説明している。年度始めには事業所目標と個人目標をそれぞれ設定し、定期的に個人面談やチェックリスト等で振り返りを行っている。	理念や運営方針及び今年度の目標として掲げた入居者一人一人に寄り添った介護の実践に、一人ひとりに応じたケアを共有し、意欲的にケアに当たっている。昨年度の水害の影響により地域住民との交流は少ない状況ではあるが、水害や台風時に隣同士声掛けあう等これまで築き上げてきた関係は確固たるものである。	近隣住民の高齢化等も鑑み、更に地域に根ざしたいと意欲的であり、この地にある事業所として地域への貢献も視野にした活動に大いに期待したい。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内の方とは回覧板等で情報交換を行っている。去年の水害の際には近隣の方に「必要なものはないか」と声をかけていたり、大型台風接近時も情報交換を行う事もあった。	回覧板により地域の催し物(祭など)の情報を得ているが、コロナ禍に現在は交流を控えている状況である。台風等には近隣住民から声もかかっており、近隣住民の入れ替りもある中で出来るだけ関わりを持ちたいとしている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在コロナ渦にあり、地域の交流等ができない状況が続いているが、電話や見学での問い合わせにて「介護保険のことでわからない」とお尋ねがあった為、お教えできる知識などをお伝えしたり、近隣の施設の概要なども説明対応することもあった。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議についても感染対策のため開催の回数が減っているが書面にて状況をお伝えしたり、電話連絡等のやり取りで意見交換を行っている。水害以降はそれぞれの参加者が被害に遭われしばらく参加が思うようにできていないところもあった。	コロナ禍の中で、社会状況等を鑑みながら開催の如何を見極め、開催出来ない回は書面審議として電話等により意見等を聞き取りしている。地域の水害の状況把握としてもこの会議が生かされ、開催出来る回は問題を提起しながら意見交換を行っている。行政にはメールを活用し議事録を発信している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	コロナ禍の為、電話連絡やメールでのやりとりが増えているが主に運営推進会議にて事業所の状況を報告している。感染対策や災害対策の事についてもアドバイスをいただき大変助かっている。	行政との対面での話し合いは難しい状況ではあるが、運営推進会議を通して情報交換等を行っている。行政担当者には地域外からの入居相談や空き状況の発信が社協からの相談に生かされている。これまでの相互の良好な関係ができあがっており、令和2年の水害やコロナ対策等にアドバイスの他、市の集団指導(オンラインにて参加)等に参加している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的な身体拘束について内部研修を行ったり、外部研修(オンライン)に参加することで知識を深めるとともに現在の状況の確認を行っている。「魔の3ロック」それぞれの視点から対策等を検討している。	身体拘束適正化委員会の他、身体拘束についてのホーム内外での研修に参加し、意識を強化させている。「コミュニケーション・接遇・言葉使い」について職員自身が振り返り、具体的に出された案件について意見交換を行っている。また、インシデントを精査しベッド配置を工夫するとともに、事前に家族への説明と同意により人感センサーを使用している。身体拘束については何があれば、運営推進会議の中で協議することとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内や市主催の高齢者虐待防止に関する研修会に参加し知識を学ぶとともに普段の状況も振り返りを努めている。また利用者の身体状況も確認を行いスタッフへ報告や対策を取るよう努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社会福祉協議会やその他が主催する権利擁護に関する研修等があるときは、可能な限り参加、学ぶ機会を作っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に契約書と重要項目説明書などを用いてわかりやすく説明している。入居の申し込み時に尋ねられた際は入居料金やおおまかな施設の概要なども説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	主に電話連絡時、ご面会時、サービス担当者会議時などに利用者の状況をお伝えするとともに、ご意見やご要望を伺い運営に反映できるよう努めている。	コロナ禍に窓越し面会とし、何かあれば電話にて報告する体制としている。家族との交流会なども開催が難しく、毎月報告書と写真を添え発行することで、情報の共有化としている。歯科受診等ホーム側から家族に相談するケース等もある。玄関に意見箱として「はっぴーになる一言」を設置している。	家族との関係作りに毎月の報告書等が活かされていることが確認された。家族の訪問や家族との関係性もコロナ禍で希薄なりつつあると思われ、家族からの意見の収集に工夫に期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々の申し送り時、ケア会議時、勉強会時などで確認検討を行い提案されたものがどうなったかの報告を受け実施するか否かを検討している。スタッフからの「現場の意見」を尊重できるよう配慮している。	毎月のケア会議にて行事や入居者の対応の仕方の検討、業務改善に向け双方向の意見交換が行い。職員の言える場所を作っている。職員向けにも事務所に「はっぴーになる一言」という意見箱を設置し、法人全体で検討する体制としている。申し送り、ケア会議、勉強会など職員の意見を出す機会が多く、職員全員でケア向上に取り組むホームである。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者、総務による年2回の個別面談と人事考課シートの記入により自己評価、個人目標の確認、自身の振り返りを行う機会を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員それぞれの置かれている状況を出来る限り把握するように努めている。研修については法人内での勉強会の参加したり、外部研修はオンラインを中心とした研修に可能な限り参加を促し自己研鑽に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ渦のため研修の開催が少ないのが現状であるが、オンラインを通して人吉球磨地区のブロック会や県の地域密着型連絡会や日本GH協会主催のオンライン研修に参加し交流の機会を作っている。		

自己 外部	項目	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の段階で担当のケアマネージャーやソーシャルワーカー相談員などから情報を得るとともにご家族やご本人にも可能であれば直接面談し情報や要望等の確認を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学や入居申し込みの時点で施設の概要や金額面等よくわからないと言うお声も聞かれるため、できる限りの情報をお伝えしご本人ご家族の要望に合ったサービスを受けられるように説明している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人やご家族のお話を聞き、ご希望に合ったサービスを説明するように努めている。必要であればグループホーム以外のサービスも含め助言を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者自身のことをしっかりとアセスメントを行い本人へ役割や生きがいを持っていただくことで関係を築いていく。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	毎月の家族への報告書を送付するとともに、電話連絡等でも本人の状況を報告している。本人からも家族に連絡できるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症対策の為なじみの場所へ出かけたりする機会は減っているが、面会は出来る限り感染対策の範囲内で提供し「馴染の人のつながり」を大事に考えている。	家族との窓越し面会、行きつけの美容室の利用、新聞を読んだり、手作りゲームを活用しながら社会性の継続、観音様参り等馴染みに関係が途切れない様出来る限り支援している。	週2～3回も訪問される方への支援として、これまでの生活等リサーチされた事案を踏まえ、外出や外泊が出来ることを目標としてプランに反映したいとの熱い思いが聴かれた。コロナ感染症が落ち着いた時期に、是非実現されるよう検討を重ねて頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者一人ひとりの相性を考え席の配置等は特に配慮を行っている。利用者の心身状況の変化で関係性が変わってきた場合もその都度場所や関わり方を工夫して対応している。レクリエーションに対しても個々の能力に差が出ており関わり方やレクリエーションの方法を変えるなどして対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院中の方に対しては担当のソーシャルワーカーと連携を取り状況を確認している。別施設への入所後に関しても相談員や家族に入居後の様子を確認するなどしてフォローに努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人ひとりにスタッフの担当を決めてそれぞれの意見を汲み取るように努めている。気づきや意見があった時点で必要であれば話し合う機会を設けている。	入居者毎に担当制を敷き、状況を見てもらいのモニタリング等により担当職員と話し合い、次のケアに反映させている。入居者の訴えをしっかりと受け止め、TPOに応じたコミュニケーションを実施することで、入居者の思い等を把握し、意思疎通も難しい状況には昔話などから行きたい場所や食べたいもの等を引き出している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日々のアセスメントとともに本人の心身状況も踏まえ一人ひとりに合った生活スタイルをスタッフ全員で検討している。おおまかな1日の生活スタイルは概ねできていると考えるが日々体調も変化するためその日その日に合わせたケアを実施している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の心身状態について血圧・体温・spo2測定・排泄状態・全身状態を確認し、スタッフ間の申し送り、情報共有を行った上でその日の体調に合わせて対応を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意向を踏まえ、各利用者へ担当スタッフがつき担当を中心にモニタリングを行う。サービス内容の実施状況等について日々の申し送り時、もしくはケア会議時に検討を行い、介護計画に反映させている。また、随時見直しを行い、必要があれば変更している。	入居者・家族の意向を基に、短期目標毎のモニタリング時に職員から意見を聞き、ケアの仕方の変更点を見極めている。認知症の進行に伴うプランの見直しや介護保険認定前（区分変更等）に家族の面会時や電話により状況を説明し、立案したプランを確認してもらい新たなプランを作成している。担当職員の気づきや観察が生かされた詳細なサービス内容である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	各利用者の個人記録にその日の状態を細かく記録するとともに気づきの点があれば直接の申し送りもしくは申し送りノートの記録を確認することで情報の周知統一を図っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の心身の変化が生じた場合かかりつけの主治医や薬剤師、当法人の訪問看護師やPT OT等に相談したり場合によっては隣接のデイサービスに支援をお願いするなどその場面に応じた対応を行うように心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	回覧板や広報誌、職員・民生委員等から地域の様々な情報を入手。現在催しの多くが中止や延期される事も多く思うように参加ができていないが、今後に向けて情報共有しながら支援できる体制を作っていく。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医に関しては入居時、自由に選択可能であることを説明し、本人・家族に意向を確認している。受診は家族へ付き添いをお願いしているが、必要に応じて職員が付き添い、詳しく状態説明が出来るようにし、適切な治療、処置を受けれるように対応している。	かかりつけ医については、これまでの医療機関や協力医など本人・家族の意向を尊重している。家族が対応する際は、1ヶ月のバイタルを説明した上で受診してもらう体制としている。歯科についても同様希望に応じているが、受診回数を多く要する場合は、本人の負担も考慮して家族へ訪問歯科への変更を相談している。職員による日々の健康管理と法人の持つ機能（看護・理学療法など）を生かしながら、入居者の健康を支えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常時連絡を取れる体制をとっており、職員が利用者の異変に気付いた際は管理者へ報告・相談を行う。 医療的な判断が必要な場合は当法人の看護師、協力病院・協力薬局へ相談・指示を仰ぐ体制を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は、職員や看護師が付き添い、情報を提供したり情報提供書を作成し渡している。また早期退院にむけて、退院後の対応方法を病院のソーシャルワーカー、看護師または当施設の専門職(PT・OT・NS)と相談し、より良い対応が出来るよう連携を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時の説明と共に重度化した場合の指針について説明を行い、同意の上契約を交わしている。その際、終末期について家族の意向をお尋ねしている。かかりつけ医やその他関係機関と相談を行いながら本人の状態に応じた支援に取り組んでいる	入居時に重度化に関する指針の説明を行い、延命治療についての同意書を得ている。継続した医療が必要でなければ、出来得るところまで支援しており、看取り支援の要望があれば、家族の協力や主治医の指示のもと取り組むことを伝えている。	管理者はグループホーム本来のあり方や、今後看取りの体制について考える必要があるとしている。一人ひとりにあった日々のケアに職員も意欲を持って取り組んでおり、変わらぬ支援に努めながら方向性が見出されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署で行われる普通救命講習や施設内での関係講習等に積極的に参加し、急変時の対応がとれるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、消防署の立ち会いと火災訓練を行っている。新人スタッフから優先して訓練を体験してもらうようにしている。その他の災害に関しても冷静に対処できるようマニュアルの整備を進めている。	年2回消防署の参加協力を得た訓練を新人職員の参加を優先し実施している。薪ストーブからの出火や近隣者に避難後の見守りを依頼する想定で行っている。防火管理者2名を配置し、備蓄は水、レトルト食、紙皿などを確保している。本社との連携は総合的な備蓄と、昨年の水害発生時には、井戸水の給水なども行われている。事務所には地域の球磨川等の浸水マップや市の災害避難地図などが掲示されている。	昨年の人吉大水害発生ではホームが高台にあることから、大きな被害はなかったものの地域との交流の機会など影響が出ている。家族代表より火災以外の水害、地震など自然災害の想定も必要との意見が出されており、今後の取組に期待したい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	お一人お一人の状況に合わせたコミュニケーションや接遇を大切に、馴れ合いにならないように気をつけている。入浴では異性介助の配慮、排泄時には一旦トイレから退室もしくは距離を取る等、失礼の無いように配慮を行っている。	10月にコミュニケーション、接遇、言葉遣いについて全体研修を開催している。呼称は苗字や反応から下の名前でも対応し、入浴時の同性介助への要望については、入居時などに確認している。トイレ、食事、入浴時の支援方法についても、個々に応じた対応を研修会(グループワーク)で学んでいる。身だしなみについては入居者や職員も同様十分配慮する事としている。	感染症対策として来訪者に依頼している検温記入表については、個人情報上の点からも個別や記載欄をカバーするなど配慮が必要と思われる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご利用者が希望等を言い易い雰囲気づくりに努めている。スタッフからも声掛けし理解が困難な方へは「はい、いいえ」で答えやすい質問をする等配慮している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日の予定として食事時間や入浴時間などを大まかに決めているが、利用者自身のこれまでの生活スタイルや日々の心身状態に応じた支援を心がけている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の能力に合わせ自身での着衣、洋服の選択、整容(化粧等)を支援している。髪は2か月に1回程度の訪問散髪。もしくは希望に応じて行きつけの美容室にてカットやカラーリング、パーマ等も対応している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者やご家族、入居以前に関わりのある病院、施設等へ食事形態、好き嫌い、アレルギー、禁止の食べ物を確認し、必要であれば代替メニュー等に対応している。利用者の能力に合わせ可能な限り下ごしらえ等を手伝ってもらっている。	昼食は同法人厨房、朝・夕食はホームで調理し個々に応じた食形態で提供している。好みを取り入れた食事になるよう聞き取りし、以前カップ麺の要望に応じ喜ばれている。入居者の食への関わりは入居者個々に応じた下ごしらえやおはぎなどおやつ作りを一緒に行っている。以前は外食にも出かけていたが、現在はその機会もなく、コロナが収まれば支援したいとしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	GH職員、調理師がバランスを考えて、1週間分の献立をたてている。食事や水分摂取量はチェック表に記録している。本人の希望や摂取量に応じて量や形態を調整したり、栄養補助食でも対応している。水分を毎日平均1200CC程度摂取いただいている		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛けや介助を行っている。自立支援を促しているが本人の状態に合わせ必要な介助を行っている。拒否のある方は時間を置いたり言い回しを変えたりその方にあった方法で対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄状況を把握し、できるだけ自立に向けた支援を行っている。意思表示の困難な方や排泄タイミングの掴めない方等もスタッフ間での申し送り、情報共有にて介助方法やタイミング、使用するおむつ、パット類の選定などを検討している。	昼・夜の排泄チェック(ブリストルスケールの活用)で個々の排泄状況を共有し、声掛けや誘導をしている。排泄用品として布パンツやリハビリパンツ、パットの選択等適宜検討し、昼間は特にトイレでの排泄を支援している。夜間帯はオムツの方やポータブルトイレを使用される方もおられる。入居生活によるADLの低下を防ぐため、自ら動いてもらえるよう手引きや支えながら誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表にて各利用者の排便時間、量、ブリストルスケールを用いた排便状態を確認。便秘の方には水分補給や服薬コントロール、体操等で対応している。食事メニューにも乳製品や食物繊維を含む食材を使用する等配慮を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回以上の入浴とし、本人が希望される時や汚染時などにできる限り希望に応じられるように努めている。入浴順番はその日の心身状態に合わせ臨機応変に対応している。	夏・冬で入浴回数の調整、順番に配慮しながら基本的に週2回以上入ってもらえるようにしている。また、希望には可能な限り、汚染時も適切に対応している。個々に応じ好みの湯温があるが、温湯になりすぎないように注意している。庭先にある柑橘も季節湯として毎年取り入れている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は個々の心身状態にあわせ、居室やソファなどにて休憩されている。就寝時間についても本人の状態を見ながら居室環境（衣服調整、居室の温度管理など）の整備を心がけている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの服薬情報を受診や変更の都度、個人ファイルに保管し、変更点を個人記録や申し送りにて情報共有している。本人の体調不良時他必要とする際はかかりつけ医、薬剤師へ相談を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者それぞれの生活歴や趣味等を把握し、新聞・本を読む、楽器の演奏、歌等を取り入れている。それをレクリエーション時にも生かし気分転換図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節ごとの行事、イベントについては感染対策と水害による活動場所の減少により。昨年から活動が思うようにできないのが現状。出来る範囲で日常、天気がいい時は、近隣と一緒に散歩等対応している。面会制限はあるが出来る限り面会できるよう家族へ促している。	感染症や水害の影響により、庭先に出たりホーム前の道路を散歩するなど身近な外出を支援している。また、受診後にドライブをしたり、感染症の状況を見ながら墓参やお彼岸めぐりも行われている。神社で開催された菊花展の様子は管理者が写真におさめ、入居者に披露し喜ばれている。外出を楽しみにされている入居者も多いが、中には車酔いにより体調を崩される方には、無理をしないようにしていることを家族へも伝えている。	外出が出来ない分、ホーム内での楽しみ事（夏祭りや敬老会など）を支援しており、継続が期待される。また、配信された花火大会のユーチューブを披露するなど職員の工夫が聞かれた。今後も外出気分を味わえるような取組（ユーチューブ、DVDなど）に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理が可能な方は、家族に了解を得たうえで、少額を所持可能。困難な方は事務所でお金をお預かりし、必要な物は職員が購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は、利用者の希望があれば、電話をかけたり、取り次いでいる。本人から頻繁に訴えられる際は、家族へも事前に連絡する旨を伝えている。手紙を出す、受け取るそれぞれの場合で必要に応じ対応を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	温湿度計を使い施設内の温度管理を行っている。季節ごとにその季節の花を飾ったり、季節の行事事に応じた物を準備し季節感を感じてもらう。夜間帯も室内灯を調整するなど配慮を行っている。	玄関先のプランターや菜園の野菜など、入居者が季節を感じながら成長を楽しんでいる。ホーム内は状況に応じ温湿度管理を徹底し、コロナ、インフルエンザへの対策として次亜塩素酸を使用した加湿を行っている。冬場は暖炉も灯され、エアコンとは異なる温もりが提供されている。リビングや廊下には入居者と一緒に作成したものや、行事等を紹介した写真なども掲示されている。	天気の良い日はベランダに洗濯物を干す量も多いと思われるが、洗濯物によってはリビングからの視界に入ることも十分考慮する必要があると思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食卓の席の配置は、気の合う利用者同士で会話が出来るようにし、トラブル回避も含めその都度席替えや机椅子のレイアウトを変更するなど状況に応じた対応を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各利用者の居室は基本使い慣れた家具や寝具家具を用意いただいている。思い出の品物や使い慣れた道具に関しても同様。	感染症対策を徹底し、入居前に一度居室内を見てもらうことで、安心につなげ準備を行いやすいよう努めている。持ち込みの品については、これまで使っていた自宅にあるものを持ってきて欲しい事などを伝えている。家具や寝具、着慣れた衣類の他、キーボードやオカリナなど趣味や思い出の品を持ち込まれている。職員は日々の掃除や身体状況に応じて物品の配置、不安になるような品がないか見直しを行っている。	家族の訪問を控えており、心配や不安にならないようホーム内の様子を写して郵送している。今後は居室内の環境なども知らせる事で更に安心につながるものと思われ、検討頂きたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室にはネームプレート、トイレや倉庫等にも札をつけ視覚的に場所の認知が出来るように工夫している。玄関や廊下には転倒防止の為、手すりを設置し安全な動線確保している。		